

『百科全書』とアリストテレス主義： 「合法的言説」としての古代哲学¹

L'Encyclopédie et l'aristotélisme :
la philosophie antique en tant que « discours licite »

井田 尚
Hisashi IDA

はじめに：検閲下の「合法的言説」としての古代哲学

フランス啓蒙主義の知を結集した『百科全書』（1751-72）において、アリストテレス主義をはじめとする古代哲学は、現代人の想像を超えた重要な役割を担っている。それは、たとえば、ド・ブラド事件（1752年）²による『百科全書』の第一次刊行中断で執筆から降りたイヴォン神父、マレ神父ら開明的な聖職者達に代わり、ディドロ自らが第3巻以降執筆を担当した「古今の哲学史」と呼ばれる哲学史項目群の独自の構成からも理解できる。「古今の哲学史」では、その名が示す通り、「ベーコン主義」、「ホッブズ主義」、「ライプニッツ主義」、「ニュートン主義」など啓蒙思想の源流となった近代の錚々たる哲学者の体系と並んで、ギリシア・ローマの古代異教世界の様々な哲学体系や国民的宗教に多くの紙幅が割かれているからだ。

「古今の哲学史」の項目の多くは、『百科全書』の典拠に用いられたヨハン・ヤーコプ・ブルッカーのラテン語著作『哲学の批判的歴史』（1742-44）からの翻案によって執筆された。それぞれの項目は典型的なパターンとして、1）哲学の学派・宗教（宗派）の始祖および後継者についての伝記的記述、2）それぞれの哲学体系の原理ないし宗教の教義の箇条書きによる定義、という二つの要素からなる。たとえば「ストア主義」であれば、ゼノンら学派の

¹ 本論文は、科学研究費・基盤研究C「『百科全書』に見る進歩と反動：公認学説の地位をめぐる新旧諸学派の科学・哲学論争」（研究課題番号 19K00111、研究代表者：井田尚）の助成を受けて行われた研究成果の一部である。ここに感謝の意を表したい。

² ド・ブラド事件：『百科全書』の執筆協力者のひとりド・ブラド神父が1751年にソルボンヌ大学に提出した神学の学位論文が一旦審査に合格した後、百科全書派が共有する感覚論哲学に基づいているとの告発を受けて、高等法院とカトリック・キリスト教会による断罪を受けた筆禍事件。

主要人物の生涯に続いて、禁欲と節制を重んじた彼らの学説の要点が箇条書きで紹介されるという具合だ。近代フランス文学史でおなじみの発想で言い換えれば、古代哲学の諸学派や古代の諸国民の宗教（宗派）の主な流れを「人と作品」という観点から記述した哲学史とも言えるかもしれない。しかし、大量の番号を付されたばらばらの命題として投げ出された学説・教説から、その体系的な全体像を捉えることは容易ではない。それに正直に言えば、事実や命題の羅列が二つ折り版・二段組でしばしば十頁近くにわたって延々と続く項目の体裁は、いかにも散漫かつ無味乾燥であり、『百科全書』を初めて手にする読者を大いに戸惑わせかねない。

こうした地味な印象が強い「古今の哲学史」をはじめとする項目群における古代哲学の記述の分析は、ディドロら百科全書派が、検閲による言論の自由の制約を意識しながら「啓蒙の哲学」を論じるために、どのようなテキスト戦略を取ったのかを理解する上でも欠かせない。その大きな理由となるのが、ギリシア・ローマなど異教世界で生まれた古代哲学は、キリスト教神学との整合性を厳しく問われた「近代人」の哲学とは時空と論理の両面で隔絶した「異教徒による過去の思想体系」と目されていた、という近代ヨーロッパのキリスト教社会に特有の事情である。

このように、古代哲学がキリスト教信仰と論理的に切断された別カテゴリーの言説と見なされることで、唯物論など、近代人が自らの名で論じれば、キリスト教の教義に抵触する危険思想として処罰を免れない学説も、過去の異教徒の謬説・妄言としてなら論じることが許された、という事実は見逃せない。実際に、ディドロは、「エピクロス主義」など様々な項目において、腹話術師さながらに、自らの哲学的信念でもある無神論や唯物論を、あの手この手で行間に潜り込ませ、古代人の口から語らせたことが知られているからである。

十八世紀のフランスでは、あらゆる著作が王権の検閲機関である出版監督局の事前検閲に付され、出版後も、高等法院やソルボンヌ大学神学部およびカトリック教会による告発・断罪を受けるリスクがあった。思想言論の自由がこうして著しく制約されていた当時の状況において、古代哲学の解説は、公刊著作の中で自由思想や危険思想を「合法的」に論じられる数少ない手段でもあったと言えよう。

そうした古代哲学の中でも、アリストテレス哲学およびアリストテレス主義（逍遙学派哲学）は、中世以来、西欧世界において、伝統的な学問的権威の拠りどころとして、別格の扱いを受けてきた。『百科全書』において、アリストテレス主義は、形而上学的なドグマの象徴として合理的な批判的になることが多いが、無神論、唯物論など、当時は検閲制度によって反キリスト教思想として禁圧されていた哲学的見解がある時代や地域においては信奉されていたことの証拠として持ち出されるケースも散見される³。本論では、主に後者の事例

³ 非キリスト教的な宗教や哲学の体系が世界には数多く存在してきたことを論証する手段としては、キリスト教成

に着目し、啓蒙期にアリストテレス主義が依然として保持していた哲学的権威が、検閲制度の下で無神論や唯物論に関する議論をぎりぎりの線で正当化するための口実として利用された可能性を探ってみたい。

1. 『百科全書』項目「実験的」に見るアリストテレス自然学の凋落

アリストテレス哲学は、中世にトマス・アクィナス（1225-74）によってスコラ学に導入・統合されて以来、キリスト教神学の論理的支柱、聖書に次ぐ絶対的権威としてヨーロッパの大学および学問界に君臨してきた。しかし、十七世紀のいわゆる科学革命を経た天文学、実験自然学、数理科学などの急速な発展によって、アリストテレスの自然学は、その有効性を次第に疑問視されるようになった。一方で、神の存在とキリスト教の正当性を論証するスコラ学の本体とも言えるアリストテレスの形而上学的な理論体系は、大学神学部を中心に隠然たる影響力を保ったが、十八世紀の啓蒙期にもなると、世俗的・科学的な見地から、経験の裏付けを欠いた形式論理として批判される趨勢は避けがたいものとなっていた。

『百科全書』でグランベールが執筆した項目「実験的」« **EXPÉRIMENTAL** »は、フランスおよび西欧世界の歴史の流れの中でアリストテレス評価が被ったこうした一連の変化に関する貴重な証言となっている。

しかし、ベーコンとデカルトが導入した実験自然学の精神は徐々に広まった。フィレンツェのアカデミア・デル・チメント、ボイル、マリOTT、彼らに続く他の数名の人物は、多くの実験を成功させた。アカデミーが次々と創設され、この哲学のやり方を熱心に取り入れた。大学の動きは、それに比べると緩慢だった。というのも、大学は、実験自然学が誕生した頃にはすっかり出来上がっていたので、長い間、昔ながらの方法に従っていたからだ。学校ではデカルトの自然学が、アリストテレスというよりもその注釈者達の自然学に取って代わった。誰も未だに真理には触れられなくとも、真理への途上にはあった。実験がいくつか行われると、誰もがそれを説明しようとした。そうした実験をうまくやり遂げ、実験同士の類似を理解するだけで満足した方がよかったのかもしれない。だが、精神がそれほど速やかに偏見から解放されるなどと期待してはならない。ニュートンが登場すると、先行者達が垣間見ることはなかったことを初めて証明してみせた。幾何学を自然学に導

立以前の古代の諸国民の歴史に証拠を求める手法の他に、たとえば、中国、エジプト、インドなどヨーロッパ以外の文明圏の諸国民の歴史に証拠を求める手法も取られ、「古代の哲学史」の項目群では、しばしば両者が組み合わせて用いられた。

入し、実験を計算と組み合わせて、正確で深遠で明快で斬新な科学を作り上げる術である。少なくとも光学の実験によっても、その宇宙体系に劣らず偉大なニュートンは、あらゆる方面に巨大で着実なキャリアを切り開いた。英国はこうした数々の見解を理解し、王立協会は誕生したばかりのそれらの見解を我がものと見なした。フランスの数々のアカデミーは、大学が何年もの間デカルトの自然学を拒否したのと同じ理由で、(英国に比べると) ゆるやかに苦労を重ねながら、ニュートンの見解を取り入れた。光明はついに打ち勝った。こうした偉人を敵視する世代がアカデミーにおいても大学においても死に絶え、今日では、アカデミーが大学に模範を示しているように思えるからだ。新たな世代が成長したのである。なぜなら、大変革の基礎がひとたび固められたとしても、それが達成されるのは、ほとんど決まって次の世代になるからだ。⁴

ダランベールによる項目「実験的」は、十八世紀中葉において、大学の旧カリキュラムとして命脈を保っていたアリストテレス哲学(アリストテレス主義)が「公認理論」としての地位をデカルトの「新哲学」に奪われ、そのデカルト主義さえも、大学より先進的なアカデミーではニュートン主義に取って代わられつつあったことを鮮やかに示している。また、それとともに、ダランベールが描き出す「アリストテレス主義→デカルト主義→ニュートン主義」という三段階の「パラダイム転換」は、ある時代における支配的な科学理論としてのパラダイムの入れ替わりが、抽象的なレベルにおける支配的理論の交替だけでは済まず、現実には守旧派の消滅に伴う科学者集団の世代交代をもってようやく完結することを教えてくれる。パラダイム転換には、科学者達による世代間闘争という人間的な側面もあるということだ。

2. ルネサンス期から啓蒙期のスコラ学批判と大学のカリキュラム改革

このように、啓蒙期になると、アリストテレス主義者達は学問の進歩を妨げる大学内部の「抵抗勢力」と見なされるようになったが、一口にアリストテレス哲学といっても、その自然学と論理学・形而上学とでは、キリスト教の教義との結びつきの強さも、大学のカリキュラムにおける位置付けの重みも異なった点には注意が必要だ。アリストテレスの自然学は、実験自然学の隆盛とデカルト、ニュートンの登場によってさすがに過去のものになりつつあった。しかし、事実の観察や科学的な実験に基づいてアリストテレスの自然学の誤りを指

⁴ *Encyclopédie*, t. 6, Art. EXPÉRIMENTAL, p. 299b.

摘・修正することと、スコラ学と一体化したアリストテレスの論理学・形而上学というキリスト教公認のドグマを公然と批判することは、やはり、次元の異なる問題であっただろう。厳しい宗教検閲が存在する絶対王政期のフランスでスコラ学を表立って批判すれば、高等法院やソルボンヌ大学神学部が黙ってはいなかったからだ。

もっとも、ルネサンス期の人文主義者達や、改革派のルターやメランヒトンらは、アリストテレス哲学を流用したスコラ学を形骸化した論争術、聖書に基づく信仰を歪めるものとして厳しく批判していた。人文主義者やプロテスタントが口火を切ったスコラ学＝アリストテレス主義批判は、フランスにおいて、ペトルス・ラムスによるラムス主義的、すなわち反アリストテレス的・反スコラ学的なパリ大学の教育改革の内に結実した。既に十六世紀のフランス、しかもパリ大学の内部において、スコラ学の伝統の中で形式論理に墮したアリストテレスの論理学とレトリックに対する見直しが、現代流に言えばカリキュラム改革として進行しつつあったことになる⁵。

十七世紀以降、デカルト哲学が「新哲学」として徐々にもてはやされ、パリ王立科学アカデミーの設立などを背景に実験自然学が急速に発展すると、論理学・弁論術を軸とするアリストテレス主義は、コレージュや大学の「旧カリキュラム」として細々と生き残ることになる。十七世紀から十八世紀にかけて、スコラ学と結びついたアリストテレス主義を目的論に基づいた非科学的な世界観、もしくは煩瑣で抽象的な観念体系の象徴として批判・諷刺する言説は、たとえばフォントネルの『世界の複数性に関する対話』（1686）やヴォルテールの哲学的コント『カンディード』（1759）などに見られるように、啓蒙思想家の間でも、ある種の常套句と化していた。

スコラ学的学問の現実遊離に対する批判は、ダランベールの執筆による項目「コレージュ」や「スコラ（哲学）」を典型とする『百科全書』の数多くの項目にも見受けられる⁶。たとえば、項目「スコラ（哲学）」« ÉCOLE (Philosophie de l') »で、ダランベールは、スコラ学者達が、知識や書物や科学的観察の手段の不足に強いられてとはいえ、現実の事物の代わりに抽象概念ばかり追い求めて徒らに術語を増やしたことを才能の無駄遣いとして嘆くとともに、デカルトのお陰でパリ大学はいつの間にやら野蛮なスコラ哲学の病（癪）から癒えつつあるが、病は完全に治癒した訳ではない、という病いの比喻を用いて、大学教育からスコラ学の残滓が未だに一掃されていないことを遺憾としている⁷。

⁵ 久保田静香、「ラムス主義レトリックとデカルト：近世フランスにおける自由学芸改革の一側面」、『エクフラシス：ヨーロッパ文化研究』、早稲田大学ヨーロッパ中世・ルネサンス研究所、第4号、2014年、pp. 66-67。

⁶ 「楽天主義」を副題とするヴォルテールの哲学的コント『カンディード』は、通俗的に解釈されたライプニッツの予定調和説に対する諷刺を重要な動機として執筆されたが、人間の鼻は眼鏡をかけるために存在するといった類の目的論的な世界観に対するヴォルテールの揶揄・諷刺は、アリストテレスの論理学・形而上学を援用したキリスト教神学およびスコラ学にも向けられている。

⁷ *Encyclopédie*, t. 5, Art. ÉCOLE (Philosophie de l'), pp. 303b-304a.

一方、項目「コレッジ」« *COLLÈGE (terme d'Architecture)* »におけるダランベールの批判は、ギリシア語、ラテン語などの死語、論理学やレトリックの規則など、言葉の知識の習得に多くの時間を費やさず、事物に基づいて自らものを考える機会を奪う当時のコレッジのカリキュラムに向けられている⁸。

以上のことから、ダランベールのスコラ学批判のひとつの大きな狙いは、言葉の知識や形式論理を偏重した学校教育のカリキュラムの改革であったことが分かる。逆に言えば、このことは、啓蒙主義が全盛を迎えた十八世紀半ばに至っても、デイドロやダランベールらがその旧弊ぶりをわざわざ批判する必要があるほど、コレッジや大学の教育課程にスコラ学的伝統が強固に残存していたことを物語っている。

3. アリストテレスの無神論的・唯物論的見解についての新旧宗派の議論

中世にトマス・アクィナスによってスコラ学に統合されたアリストテレス哲学は、古代ギリシアの異教徒の哲学者の世界観に立脚した議論なので、当然と言えば当然だが、キリスト教にとって不都合な学説や見解も含んでいた。そもそも、「知」の領分に属する哲学を「信」の領分に属するキリスト教神学に統合する力業には原理的な困難が伴うため、歴代のスコラ学者や神学者は、アリストテレス哲学のキリスト教神学との整合性や、宗教的な観点からのアリストテレス哲学の無謬性を論証するのに腐心した。中でも、アリストテレスの無神論的・唯物論的見解は、キリスト教の教義に照らすと、自ら創造した世界を摂理によって導く神の存在を否定する不敬虔な「誤謬」に当たりかねないので、重大な争点のひとつとなった。たとえば、トマス・アクィナスは、世界が永遠であるとのアリストテレスの主張について、世界が大昔から永遠に存在するという考え方も、世界に始まりがあるという考え方も論理的には可能なので、どちらが事実であるかは理性では証明し難く、世界に始まりがあることは信仰箇条の問題だとした⁹。

だが、このトマスの解決策からも分かるように、キリスト教会が認める啓示的真理があらゆる学問的・科学的真理に優越し、前者に違反する学説や見解がしばしば告発・断罪されたフランスやイタリアの歴史を顧みれば、世界が永遠であるとのアリストテレスの説を真理として唱える道は、事実上閉ざされていた訳である。

ドイツにおける宗教改革の推進者ルター、メランヒトンらは、カトリックのスコラ学を聖書に基づいた純粋な信仰に反するものとして痛烈に批判したが、必ずしもアリストテレス哲

⁸ *Ibid.*, t. 3, Art. *COLLÈGE (terme d'Architecture)*, pp. 634b-637b.

⁹ 上枝美典「盛期スコラとトマス」、『西洋哲学史 II 「知」の変貌・「信」の階梯』, (神崎繁・熊野純彦・鈴木泉編), 講談社, 講談社選書メチエ, 2011年, p. 290.

学そのものを否定した訳ではなかった。たとえば、ルターが宗教改革でアリストテレス哲学を取り込んだスコラ学を峻拒したことを受け、ルターの同僚メランヒトン、アリストテレス哲学を利用しつつ、よりルター主義の原理に適合した哲学体系を築くことで、プロテスタントの大学にふさわしいカリキュラムを再構築しようとした¹⁰。

彼ら改革派の神学者は、アリストテレス哲学に無神論的・唯物論的命題が含まれていることをよく理解していた。たとえば、テュービンゲン大学でアリストテレス『自然学』の講義(『哲学講義あるいはアリストテレス自然学』)を行なったヤーコプ・シュックは、いかなる存在も非存在からは生じ得ないとの(キリスト教の創造説に基づく)考えから、世界は永遠であるとのアリストテレスの主張には反対した¹¹。

このように、アリストテレス哲学は、カトリックに限らず、彼らのスコラ学を批判したプロテスタントによっても神学を支える論理体系として利用されたが、いずれの場合も、無神論、唯物論をはじめとして、キリスト教の教義と相容れないアリストテレスの哲学的見解は慎重に除外された。しかし、アリストテレス哲学を「キリスト教化」して神学体系や大学のカリキュラムに落とし込む努力をいかに払おうとも、無神論や唯物論に当たる見解がアリストテレスの原典に見られるとなれば、その事実そのものがキリスト教の正統性を脅かし、不信仰者を利することになりはしないだろうか。アリストテレスがイエスの誕生以前の異教世界の哲学者であるにしても、キリスト教神学とスコラ学の論理的支柱とされるアリストテレスが無神論者、唯物論者であったなどということは、都合の悪い話のはずだからだ。それだけに、無神論者や唯物論者に強力な論拠を与えかねないアリストテレスの一部の見解は、神学的な論争の文脈において、極めて重要な争点となったことが予想される。

4. ベール『歴史批評辞典』項目「アリストテレス」におけるスコラ学批判と「無神論者・唯物論者アリストテレス」のトpos

とはいえ、本論の目的は、中世以来の神学・哲学論争の歴史を網羅的に辿ることではない。そこで、本節では、先述のヤーコプ・ブルッカーによる『哲学の批判的歴史』などと並んで、『百科全書』の哲学史関連項目の典拠に利用されたピエール・ベール(1647-1706)による『歴史批評辞典』(1696年初版)において、アリストテレスの異端的・無神論的見解を巡る議論がどのように展開されているかに着目したい。

思想史上の通説として、ベールは同書で、様々な歴史上の人物に関する伝承(歴史)にデ

¹⁰ 楠川幸子(宮崎文典訳)「近世スコラと宗教改革—ルター主義者とアリストテレス哲学」、『西洋哲学史 III『ポスト・モダンの前に』(神崎繁・熊野純彦・鈴木泉編)、講談社、講談社選書メチエ、2012、pp. 118-119。

¹¹ 前掲書、pp. 103-105。

カルト流の方法的懐疑を適用し、博引傍証に基づいた詳細な註解によって、モレリ『歴史大辞典』（1674年初版）など先行文献のありとあらゆる誤謬や迷信を炙り出したとされる¹²。さらに、カトリック教会の弾圧で祖国フランスからの亡命を強いられたユグノー（カルヴァン派プロテスタント）の立場から、宗教的寛容をも説いた。こうした成り立ちを持つ『歴史批評辞典』は、十七世紀末から十八世紀前半の自由思想家達や、ヴォルテール、ディドロら百科全書派のフィロゾフ達に権威主義や偏見・迷信に対する合理的批判のロジックや論点を豊富に提供することで、しばしば啓蒙思想の武器庫と呼ばれるようになった。

『歴史批評辞典』の項目「アリストテレス」でベールは、スコラ学と結びついたアリストテレス主義がフランスの学問界で唯一かつ排他的な哲学的権威として熱烈な支持を集めた経緯と、アリストテレス哲学の反キリスト教的もしくは無神論的な論点に関する議論の歴史に、以下のように触れている。

アリストテレス以外のあらゆる哲学を禁じた高等法院は、〔神学者の〕博士達よりもまだ弁護のしようがある。なぜなら、この哲学を最良のものと信じていたのであろうがなかろうが、高等法院のメンバー達は、学問上の意見分裂が国家の安寧に悪影響を及ぼすのを恐れて、公益のために新たな学説を禁じたのかもしれないからだ。賢明な人々なら非常に驚くに違いないのは、〔大学の〕教授達がアリストテレスの哲学的仮説に、あれほど極端に拘泥したことである。もし彼らが思い込みを抱いたのが、アリストテレスの詩学や弁論術に対してであったならば、これほど驚きはしなかっただろうが、アリストテレスの著作の中で最も弱い部分、すなわち論理学と自然学に執着したからである。アリストテレスのどれほど絶対的な信奉者達であろうとも、キリスト教に抵触する論点についてアリストテレスを放棄した点は、正当に評価しなければならない。それらの論点は極めて重大である。というのも、アリストテレスは宇宙の永遠性を主張し、神の摂理が月下界の存在に及ぶとはいささかも信じなかったからである。アリストテレスが靈魂の不死を認めたかどうかは、よく知られていない。この事実上の問題に関してイタリアを席卷した長い論争については、どこか別のくだりで報告することにしたい。高名なカプチン会士ヴァレリアーノ・マニは1647年にアリストテレスの無神論に関する著作を刊行した。それより

¹² もっとも、ベールがデカルト主義者かどうかについては研究者の間でも賛否両論がある。たとえば、『歴史批評辞典』を含むビエール・ベール著作集の訳者・野沢協によれば、ベールは歴史を虚妄の学とするデカルト主義者の主張に歴史考証学の立場から敵対した。一方、ベールがデカルトを引き合いに出す場合の「デカルト的」とは、批判的という程度の意味に過ぎない。以上の理由から、『歴史批評辞典』が「反デカルト的」であるというのも、ベールがデカルト的な方法を歴史研究に適用したというのも、厳密にはいずれも誤りだというのが野沢の解釈である。（ビエール・ベール著、野沢協訳『歴史批評辞典Ⅰ（A-D）』、ビエール・ベール著作集、法政大学出版局、第3巻、1982年、p.1298.）

130 年前に、マルクス・アントニウス・ヴェネリウス〔マルカントニオ・ヴェニエーロ〕は、アリストテレスの教説とキリスト教の真理との数々の矛盾を示す哲学の著作を出版していた。カンパネッラは、1630 年にローマで出版許可を得た著作『克服されたる無神論』で同じことを主張した。つい最近、何冊かの著作の序文の中で、アリストテレスの哲学はスピノザ主義とそう変わらないと主張した者達がいる。だが、逍遙学派の一部の哲学者達を信ずるならば、アリストテレスは三位一体の秘蹟を知らない訳ではなかったという。¹³

上の一節の冒頭で、ベールは、書物の検閲に関する高等法院とパリ大学神学部の伝統的な役割に触れている。高等法院とパリ大学神学部は、出版統制局が、王権によるあらゆる世俗の書物の事前検閲と特権付与の権限を担う専門機関として自立した役割を果たすようになる前から、主として宗教・思想関連著作の検閲を担っていた。

上の引用文の例に基づいて両者の関係を分かりやすく説明すれば、キリスト教会が（スコラ学の理論的支柱として）「公認」するアリストテレス哲学以外の新思想を説いた書物をパリ大学神学部の「博士達」が「禁制思想」の著作として告発すると、高等法院が、それらの書物の発禁や焚書、著者の投獄などの法的処罰を下す、という役割の分担が行われていたのである¹⁴。

引用文中で「博士達」(docteurs)と呼ばれているのは、〔パリ〕大学神学部で宗教・思想関連著作の検閲を担っていた神学者達と見て構わないであろう。一方で、「教授達」(professeurs)と呼ばれているのが神学者達の単なる言い換えなのか、あるいは〔パリ〕大学の神学部ではなく、学芸学部などの教員達を指すのかは判然としない。そもそも、博士は学位、教授は大学教員の位階を指す用語であって、同一人物が博士かつ教授であっても何ら不思議はない。

だが、「博士達」(神学者達)が「教授達」を指すのかどうかはさておき、ベールがアリストテレスの論理学と自然学に執心する「教授達」に冷笑を向ける直接の理由は、本文外に付された註(M)に示されている。ベールは、この両分野に関するアリストテレスの著作の議論が脆弱であることは、ガッサンディの『アリストテレス学徒にたいする逆説的論考』(1624)を読むだけで納得が行くと述べ、アリストテレス哲学には数々の長所がある点も認めた上で、アリストテレスの論理学や自然学を手放しで礼賛する学問的風潮に釘を刺してい

¹³ Pierre Bayle, *Dictionnaire historique et critique*, 5e édition, Amsterdam, Leyde, La Haye, Utrecht, [4 vols. in-folio], 1740, t. 1, Art. ARISTOTE, p. 327. (下線部は筆者による強調、鉤括弧の中は筆者による補足である。人名の訳語については、ビエール・ベール著、野沢協訳『歴史批評辞典 I (A-D)』, ビエール・ベール著作集、法政大学出版局、第3巻、項目「アリストテレス」、1982年、p. 389の訳に従った。)

¹⁴ 二宮素子、「フランス絶対王政下の書物と検閲」, *Study Series*, 一橋大学社会科学古典資料センター, 2号, 1982年, pp. 5-6.

る。ベールによれば、アリストテレスの自然学の大半が無価値である主な原因は、アリストテレスが、自然界の様々な変化は物質の粒子の配列の入れ替わりに過ぎず、〔無からの〕発生なる概念は認められないとした、先行世代の優れた哲学者達のドグマ〔原子論〕に従わなかった点にある。また、十七世紀に自然学がいくらか輝きを取り戻したとすれば、それは、アリストテレスが拒んだ古代の明証的な哲学原理〔エピクロスの原子論〕が復活したお蔭であるという¹⁵。このようにベールは、アリストテレスの論理学と自然学が省みられなくなった主要な原因を、ガッサンディによって復活を遂げた古代原子論の自然学への影響に帰している¹⁶。

こうした一連のベールの指摘は、アリストテレスの論理学と自然学を両輪として編成された〔パリ〕大学学芸学部のスコラ学的なカリキュラムの伝統が、大学へのデカルト哲学の浸透や科学アカデミーを中心とした実験自然学の隆盛によって、時代にそぐわなくなっていた十七世紀末のフランスの歴史状況とも重なり合う¹⁷。

続く箇所ではベールは、アリストテレスの教説に、キリスト教の教義に抵触する数々の重大な論点が含まれていることを指摘している。それによれば、アリストテレスは少なくとも、1) 世界が永遠であること、2) 神の摂理が月下界には及ばないことは信じていたが、3) 靈魂が不死の存在であることを認めていたかは不明だという。これら三つの論点のどこが問題であるのか、以下で順次検討して行こう。

1) 世界が永遠であること：これは、先ほども触れたように、世界が無から創造されたとするキリスト教の教義に反する概念である。聖書によれば、宇宙（世界）は神による天地創造に始まり、神による最後の審判で終末を迎える。つまり、キリスト教の宇宙（世界）には、時間的な始まりと終わりが設定されているのである。それに対し、宇宙が始まりも終わりも持たず、大昔から永遠に存在していると主張することは、物質の永遠性を唱える唯物論

¹⁵ Pierre Bayle, *Dictionnaire historique et critique*, 5e édition, Amsterdam, Leyde, La Haye, Utrecht, [4 vols. in-folio], 1740, t. 1, Art. ARISTOTE, p. 327, note (M), col. a-b.

¹⁶ 実際に、アレクサンドル・コイレによると、真空を否定するアリストテレスの存在論に抗してガッサンディが復活させた古代原子論は、ルクレティウスに発する原子論と、プラトンに発し「ガリレイ革命」や「デカルト革命」に象徴される数学主義とを統合したニュートンの数学的自然学に象徴される近代科学の発展に、哲学的・存在論的な基盤を提供した。(Alexandre Koyré, « Gassendi et la science de son temps », in *Tricentenaire de Pierre Gassendi 1655-1955*, Presses Universitaires de France, 1955, p. 187.)

コイレによるガッサンディの科学史上の位置付けに関しては、以下の論考も参照のこと。中金聡, 「エピクロスの帰還—ガッサンディにおける哲学的著述の技法について—」, 『国士館大学政治研究』, 第2号, 2011年, p. 72.

¹⁷ パリ大学を含む中世の大学の学芸学部では「自由学芸」が教えられた。このいわゆる「自由七科」は、言葉の秩序に関する学問(文法学、修辞学、論理学)と自然の秩序に関する学問(算術、幾何学、音楽、天文学)とに大別でき、前者の三科目はアリストテレスの論理学に関する著作、後者の三科目はアリストテレスの自然学に関する著作を拠り所とするようになっていった。こうして、1255年にパリ大学学芸部のカリキュラムでは、アリストテレスのほぼ全ての著作を学ぶことが義務づけられた。(加藤和哉「中世における理性と信仰」, 『西洋哲学史 II 「知」の変貌・「信」の階梯」, (神崎繁・熊野純彦・鈴木泉編), 講談社, 講談社選書メチエ, 2011年, pp. 341-343.

を唱えるのに等しい。こうした哲学的見解が、しかもアリストテレスという西欧世界最大の学問的権威によるお墨付きを得た積極的な主張として流布することは、たとえ古代人の哲学的見解を紀元後に成立したキリスト教の教義に基づいて断罪するのが時代錯誤であるにせよ、キリスト教会や大学神学部にとって望ましくない事態であっただろう。

2) 神の摂理が月下界には及ばないこと: スコラ学に取り込まれたアリストテレスの宇宙論において、宇宙は天上界と(地球を含む)月下界とに区分され、両者は全く異なる世界とされていた。この哲学的前提の下に神の摂理が月下界に及ばないと主張することは、キリスト教の文脈に置き換えると、神の存在と創造主としての役割そのものを否定するとまでは行かなくても、天地創造後の宇宙(世界)への神の介入を否定する理神論に近い考え方に相当し、やはり正統カトリックの教義からは外れる。

3) 霊魂が不死の存在であること: この最後の論点が極めて重大であることは言うまでもない。人間は肉体と霊魂とからできており、肉体は死滅するが霊魂は永遠に存在し続けるという、いわゆる霊魂不滅説は、キリスト教の教義の要をなす考え方のひとつだからだ。その霊魂不滅説に関するアリストテレスの認否が不明だとしたら、極端な場合には、アリストテレスは霊魂の不死を否定する唯物論者であったという仮定も成立しかねない。ベールによれば、アリストテレスが著作の中で霊魂の不死を認めたのかどうか、という事実問題をめぐってイタリアで大論争が繰り広げられたというのも、至極もつともである。

ベールは引用の最後の部分で、アリストテレスの哲学的見解にはキリスト教の教義と矛盾するものも含まれていると考えた者達が、イタリアのカンパネッラを含め複数いたばかりか、アリストテレスが無神論ないし唯物論を唱えているという過激な主張をする者達までいたと述べている。中でも、アリストテレス哲学を、十七世紀から十八世紀にかけて唯物論の代名詞とされたスピノザ主義と同一視する著者が最近現れたとの一節が当時の読者に与えた衝撃は大きかっただろう。カトリック国の神学および大学の学芸教程の柱の役割を果たしたスコラ学のみならず、プロテスタント国の大学の学芸教程をも支えてきたアリストテレス哲学を唯物論と同一視することは、アリストテレス哲学を護教的な目的に利用してきた新旧キリスト教会の権威とキリスト教の教義に対する「冒瀆」になりかねないからだ。アリストテレスは(キリスト教の教理である)三位一体の概念を知っていたとの逍遥学派の説をベールが引用末尾で取ってつけたように紹介しているのも、アリストテレス哲学を唯物論と同一視する上述の挑発的な論点の過激さを和らげるためと考えられなくもない。

カルヴァン派プロテスタントのキリスト教者であるベールは、あくまでもカトリック神学・スコラ学およびプロテスタントの他宗派による信仰の解釈に揺さぶりをかけることを目的に、様々な哲学的見解をぶつけ合い、それらの根拠を掘り崩す懐疑主義的な議論を展開しているのであって、アリストテレス哲学を唯物論と同一視する見解を、ことさら自らの哲学的信念として主張したようには思えない。

とはいえ、キリスト教の教義の正当化にも唯物論の正当化にも歴史的に利用されてきたアリストテレス哲学の「両義性」を示唆するベールの議論は、ディドロら啓蒙主義者達に、アリストテレスの学問的権威を隠れ蓑に、本来なら検閲で処罰される唯物論的見解を古代哲学の紹介という名目で堂々と論じる、またとない口実を与えた可能性はないだろうか。実際に、たとえば、ベールが『歴史批評辞典』で論じたことで有名な「有徳な無神論者」のトボスは、ディドロらによって、無神論を暗黙のうちに擁護する論拠として再利用された。以下の節では、ベールがアリストテレス主義にまつわる哲学的議論の歴史の一環として紹介している「無神論者・唯物論者アリストテレス」という実に興味深いトボスが、『百科全書』においてどのように扱われているのかを見届けよう。

5. 『百科全書』項目「アリストテレス主義」（執筆者イヴォン神父）のアリストテレス擁護に見られる護教的意図

まずは、『百科全書』でアリストテレスの哲学について論じた代表的な項目のひとつである項目「アリストテレス主義（執筆者イヴォン神父）から見てみよう。イヴォン神父は、ディドロと同じくブルッカーの『哲学の批判的歴史』を典拠に利用しているので、どこまでが個人的見解であるかは別として、イヴォン神父は議論の中で、ベールも紹介しているアリストテレス哲学の危うい論点の数々に以下のように触れている。

たとえば、アリストテレスは会話の中で、供物や生贄など全く無駄であり、神々は寺院の外見上の豪華など気にもとめないとかまで主張してはばからなかった。これは、神の摂理が月下界には及ばないというアリストテレスの見解の帰結のひとつであった¹⁸。このアリストテレスのものとされる見解をキリスト教の文脈に置き換えると、カトリック教会の派手な聖堂や典礼に対する間接的な批判になりかねないことは言うまでもない。

さらに、イヴォン神父いわく、ディオゲネス・ラエルティオス¹⁹の証言によれば、アリストテレスは天界の事物は神の力の支配を受け、地上の事物は天界とのある種の共感によって支配されていると信じていた。この同じ理屈に従えば、靈魂が死すべき存在であることをアリストテレスに基づいて証明できる。実際に、神は靈魂の行いの証人でも何でもないで、靈魂の行いを罰することも賞することもできない。おまけに、神は人間の行為に関わり合いになろうとは全く思わない。もし神にそうする気があるならば、人間の行為を予見するだろうから人間は全く自由でなくなるであろうし、人間に自由が全くないならば、地上では全て

¹⁸ *Encyclopédie*, t. 1, Art. ARISTOTÉLISME, p. 654ab.

¹⁹ 3世紀前半頃のギリシアの哲學家で、『著名哲學者の生涯と教説』全10巻の著者。エピクロスを代表とする哲學者達の生涯に関する伝記的叙述には定評がある。

がうまくいくことになるだろう。ところが、地上で起きる全ては、変化と多様性と災厄と苦しみに満ちているのだから、人間は意志を自ら決定しているものであり、神は人間に対していかなる力も持たないのだ。このように、地上の人事が変化と苦難に満ちている現実を月下界に神の力が全く及ばないことの証拠と見なすアリストテレスは、靈魂を死すべきものと考える一方で、人間の靈魂は神の一部であるとの考えから、永遠の賞罰という（キリスト教の）ドグマを否定したのだという²⁰。

イヴォン神父によれば、第一動者としての神の存在も認めているアリストテレスを、世界の永続性を信じたからといって無神論者として責めるのは間違っている。しかし、靈魂の性質も靈魂の不死も知らず、キリスト教の教義と相容れない不健全な神の観念を抱いていたアリストテレスは、やはり広い意味では無神論者に当たるのかもしれない。だから、アリストテレスがキリスト教のあらゆる神秘を予知していたなどと強弁するのは、古代哲学者をキリスト教化しようとするあまりの勇み足なのである²¹。

『百科全書』項目「アリストテレス主義」における、以上のイヴォン神父の議論は、1) 世界は永遠である、2) 靈魂は死すべき存在である、3) 神の力は地上には及ばない、といった（バールの『歴史批評辞典』でも確認した）論点を列挙する形でアリストテレス哲学の無神論的側面を浮き彫りにしつつ、キリスト教の誕生以前に生きた古代哲学者を無神論者扱いするのは時代錯誤であるとの理由から、アリストテレスを「免罪」するものと言える。

先述のように、イヴォン神父は項目「アリストテレス主義」を含む哲学史項目の執筆にあたって、ブルッカーの『哲学の批判的歴史』を典拠に利用した²²。『ディドロと百科全書』の著者ジャック・ブルーストによれば、ブルッカーはバールを筆頭とするプロテスタント系知識人の批判精神を継承していたが、キリスト教の合理的な検討を突き詰めると無神論に陥りかねないリスクには自覚的で、その最後の一線は決して踏み越えようとしなかったという²³。啓示宗教としてのキリスト教に合理的検討を加えながら、唯物論とはあくまで一線を画したブルッカーの知的姿勢は、アリストテレスの「無神論的見解」の数々を紹介し、カトリックの立場からブルッカーのスコラ学批判には反論を加えつつ、最終的にアリストテレスを無神論者としての責めから守ろうとする（ブルッカーの記述を踏まえた）イヴォン神父の議論にも、概ね受け継がれているものと考えてよいだろう。

イヴォン神父は、ド・ブラド事件への積極的関与を疑われて一時期オランダに亡命したこ

²⁰ *Ibid.*, pp. 659a-660a.

²¹ *Ibid.*, pp. 659b-660a.

²² イヴォン神父は、項目「アリストテレス主義」の議論の多くをブルッカーに負っているが、ルターの批判にもかかわらずスコラ神学を維持しようとしたローマ教会の決定は「良き哲学」に損害を与え、教会の決定に従った大学は野蛮に支配され続けた、とのブルッカーの議論に対しては、カトリックの立場から反論を加えている。（*Ibid.*, p. 663.）

²³ Jacques Proust, *Diderot et l'Encyclopédie*, Armand Colin, 1962, p. 246.

とで知られる。また、「良き哲学」と正統カトリシズムは両立可能であるとのイヴォン神父の信念は、正統、非正統の別を問わないカトリック勢力に不評を買った²⁴。だが、あらゆる知識は感覚に由来するという感覚論を唱えることや、「良き哲学」とキリスト教の一致を説くことが、たとえ正統カトリックの教義から外れるとしても、イヴォン神父が決して無神論や唯物論を積極的に説いている訳ではないことには留意すべきだろう。イヴォン神父ら、『百科全書』の第1、2巻で哲学史項目の執筆を担当したカトリックの開明的・合理主義的な聖職者達の議論をデイドロらが、無神論、唯物論について「合法的」に論じるのに好都合な「表看板」として意図的に利用したかはともかく、イヴォン神父自身におそらくそこまで過激な意図はなかった点は、ここで改めて確認しておきたい。

6. 『百科全書』項目「(天地) 創造」および「混沌」とアリストテレスのドグマの無神論的・唯物論的な「利用」

アリストテレスの無神論的・唯物論的な見解が論じられている『百科全書』の項目は数多いが、執筆協力者によって、宗教的・哲学的な立場や執筆意図が異なるので、そうした哲学的見解が、反宗教的なドグマとして積極的に主張されているのか、あるいは護教論的な意図に基づく反駁の対象として言及されているのかを見分けるのも、案外容易ではない。それは、デイドロら百科全書派を中心とする執筆協力者達の、検閲を多少なりとも意識した韜晦的な文章術による面も大きいのかもしれない。

6-1. 項目「(天地) 創造」(形而上学)(執筆協力者不詳)の場合

たとえば、ドイツの哲学者クリスティアン・ヴォルフ(1679-1754)の祖述者サミュエル・フォルメー(1711-97)から提供を受けた哲学辞典の手稿を典拠とする、項目「(天地) 創造」(形而上学)の冒頭部分を以下に引用してみよう。

(天地) 創造とは、既存の物質から何も引き出さずに何かを生み出す無限の力による行いである。天地創造のドグマが一部の異教徒の哲学者達によって唱えられたのか、あるいはユダヤ教の博士達やキリスト教徒によって初めて説かれたのかは、相当ややこしい問題である。その点に関する学者達の意見は割れているが、異教徒達に対し否定的な立場を取る論者達の見解の方が本当らしく思える。我々は、彼らの

²⁴ Frank A. Kafker, « Notices sur les auteurs des 17 volumes de « discours » de l'Encyclopédie (suite et fin) », in *Recherches sur Diderot et sur l'Encyclopédie*, No. 8, 1990, p. 120.

著作を信用して、古代の全ての哲学者達は第一物質が永遠であると信じたと主張するのを、いささかも恐れない。そう思えるのは、彼らの国語に、創造や死滅を表わすいかなる語彙も、言い方すらもなかったからである。「生み出し死滅させるということがどういうことなのか理解できる自然学者がひとりとしているだろうか」とキケロは尋ねた。思弁をより徹底したアリストテレスは、こう付け加えた。世界の最初の住人達は常に、物質は他の外的原因に依存せず、それ自体として存在すると考えた。〔…〕物質の永遠性は、彼ら〔世界の最初の住人達〕が、神の力を犠牲にすることで神の善良さを守り、道徳的な悪や物理的な悪の起源を一見それほど良識に反しないやり方で説明するのに役立った。²⁵

このように、項目「(天地) 創造」によれば、古代のあらゆる哲学者達は物質が永遠に存在することを信じていた。より正確に言うと、アリストテレスおよび逍遥学派を含む古代の全ての哲学者は、物質は永遠に存在することに同意していたが、世界の現在の秩序は、1) 物質と同じぐらい古くから存在する(物質的な)神によって創造されたか、2) 原子の偶然の運動によって形成されたか、3) 世界(の現在の秩序)は(物質と同じく)永遠に存在するか、のいずれかであると考えていた。

もし古代人の哲学者達が、現在の世界の秩序がいついかなる原因によって形成されたかについては見解を異にするとはいえ、世界の素材たる物質が永遠に存在する点については同意していたとすれば、彼らの主張は、神が無から世界を創造したというキリスト教の教義に明らかに抵触する。案の定、たとえば、『百科全書』バリ版(初版)の再版に基づいてイタリア・ルッカで出版されたいわゆるルッカ版第4巻(1759年)巻頭の補足注の執筆者のひとりセバスティアーノ・サケッティ神父は、上記の論点を含む項目「(天地) 創造」の内容がシヨメックスら反百科全書派による攻撃やローマ教皇庁による断罪を引き寄せることを懸念して、アリストテレスら古代の哲学者達の哲学体系においては、物質が永遠に存在するという命題と、世界は神によって創造されたとの命題とが矛盾なく両立し得るので、彼らは無神論者には当たらないとの趣旨の擁護論を繰り広げている²⁶。

では、典拠として名前が挙げられているフォルメー自身は、どのような意図から「物質の永遠性」という古代人達の哲学的見解に触れたのであろうか。ジャック・プルーストによれ

²⁵ *Encyclopédie*, t. 4, Art. CRÉATION, p. 438b. (下線部は筆者による強調。)

²⁶ *Encyclopédie*, seconde édition enrichie de notes, & donnée au public par M. Octavien Diodati noble lucquois, à Lcques, chez Vincent Giuntini imprimeur, t. IV, 1759, Supplément de notes, p. viii, col. a-b. 『百科全書』ルッカ版におけるサケッティ神父の役割と思想傾向に関しては、以下を参照のこと: Mario Rosa, « *Encyclopédie*, « Lumières » et tradition au 18e siècle en Italie », *Dix-huitième Siècle*, No. 4, 1972, p. 130.

ば、フォルメー自身は、キリスト教徒として超えてはならない一線を弁えたブルッカーのプロテスタント的な合理主義を最もよく理解した哲学者であったという²⁷。そのフォルメーが、「物質は永遠に存在する」という古代の哲学者達の見解を、積極的に自らの無神論的・唯物論的見解を正当化する目的で引き合いに出したというのは、やはり言い過ぎになるだろう²⁸。

しかし、フォルメーが提供した手稿はあくまでも項目「創造」の素材に過ぎず、項目「(天地) 創造」には、フォルメーとは別人でしかも匿名の執筆者がいる事実を忘れてはならない。項目末尾には、「無からの創造は、故に理性に適っており、神の力を最高度に高めるとともに、無神論を根こそぎにするものである」とのいかにも口実めいた結論に続いて、「この項目の大部分はフォルメー氏による」との出典指示が見られる。だが、フォルメーの手稿そのものは失われているため、実際にどこまでが本人による議論で、どこからが匿名の執筆協力者による議論なのかは判別のしようがない。それだけに、フォルメー自身にはその意図がなくとも、フォルメーの手稿を編集加工して項目「創造」を書いた匿名の執筆協力者が、「世界の永遠性」など、キリスト教の教義を根本から揺るがしかねない重要な論点に読者の目を積極的に引きつけようとしていないとは言切れないのである。

6-2. 項目「混沌」(哲学 & 神話)(執筆者ディドロ)の場合

項目「混沌」の冒頭で、ディドロは、ギリシア神話でエレボス(闇)とニュクス(夜)を生んだ原初の混沌とされるカオスの神話的解釈に続いて、古代の哲学者達による混沌の概念の解釈を以下のように説明している。

「…」古代の哲学者達は、この単語によって、形も規則性も持たない、ありとあらゆる種類の粒子の雑然とした混合を表わし、それに運動が不可欠だと仮定した。つま

²⁷ Jacques Proust, *Diderot et l'Encyclopédie*, Armand Colin, 1962, p. 247.

²⁸ もっとも、フォルメーが後年出版した学芸用語辞典には『百科全書』と同名の項目「(天地) 創造」が収められている。その定義によれば、創造とは、「既存の物質から何も引き出さずに何かを生み出す無限の力による行い」を指す。この定義の文言は、『百科全書』項目「(天地) 創造」冒頭の定義とはほぼ一言一句、同一である。この定義がフォルメーによるオリジナルのものか、あるいは他の辞典類から借用したものかは不明だが、少なくとも、同項目がフォルメーの手稿を実際に典拠とすることの証拠とはなるだろう。

同項目で、フォルメーは以下のように、神による天地創造と物質の永遠性を二律背反の対立概念としている。「もし世界を構成する諸存在が、つまりは世界そのものが、それ自体では存在できず、またそう仮定することに矛盾がなければ、創造は必然である。もし逆に、創造能力による行いが矛盾した概念であることを証明できるならば、物質もしくは世界の永遠性を認めねばなくなるだろう。」(Jean Henri Samuel Formey, *Dictionnaire instructif: où l'on trouve les principaux termes des sciences et des arts dont l'explication peut être utile ou agréable aux personnes qui n'ont pas fait des études approfondies*, Halle, chez Jean Justin Gebauer, 1767, t. 1, p. 130a.) 物質の永遠性の論理的な可能性を容認するかのような後半部分は、いかに信仰ではなく哲学の水準における論理的な仮定とはいえ、宗教検閲が格段に厳しいフランス、イタリアなどカトリック諸国では公刊著作での主張が憚られる大胆な主張と思われる。

り、それに世界の形成の原因を帰したのだ。この体系は、彼らに言わせると、それ自体は素晴らしいが、彼らが一般化し過ぎた、何物も無からは生じ得ない [ex nihilo nihil fit] という公理の帰結なのである。彼らは、この原理を結果に限定せずに動力因（作用因）にまで拡張し、天地創造を現実離れして矛盾した概念であると見なした。項目「(天地) 創造」を参照せよ。²⁹

上の引用の議論は、古代の哲学者達は、元々運動の能力を備えた物質の粒子の混沌の中から世界が形成されたとの考えから、無からの創造としての（天地）創造の概念を否定するものである。この議論は、古代哲学を論じているようでありながら、キリスト教の創造説の「論理的矛盾」を標的としており、そのことは、先に分析した項目「(天地) 創造」への参照指示が項目末尾に付されていることから明らかである。

また、古代哲学における「混沌」の概念が、キリスト教の教義が想定する「(天地) 創造」の概念を論理的に代替し得る宇宙開闢の説明原理として取り上げられ、項目「(天地) 創造」と項目「混沌」が参照指示で結ばれていることから、両項目には、少なくとも編纂者としてのディドロによる編集作業が介在している、と考えることは許されるだろう。しかも、参照元の項目「混沌」の執筆者がディドロ自身であるとなれば、フォルメーの手稿を典拠とした項目「(天地) 創造」の匿名の執筆者が果たして誰であるのか興味は尽きないが、ここでは、両項目が編纂者ディドロの一貫した編集意図によってコントロールされていることを確認できれば充分であろう。

項目「混沌」の続きの箇所には、アリストテレスが主張したとされる「世界の永遠性」の概念に言及する記述が見られる。

アリストテレスとピタゴラス学派を例外として、地球が永遠の昔から我々が目にするのと同じ形をしていたと主張した者は誰もいなかったが、あらゆる時代の賢者達の一貫した見解によると、現在では地球と呼ばれているものも、初めは、我々が見ているがままの地球の原理と素材を含んだ無形の塊でしかなかった、とバーネット博士³⁰が断言するのをもっともである。³¹

以上の議論は、キリスト教の教義に照らすと、当然ながら非常に問題が多い。引用文前半の、世界が永遠の昔から現在の形状をしていたという考えは、神が無から現在の姿の地球を

²⁹ *Encyclopédie*, t. 3, Art. CHAOS, pp. 157b-158a.

³⁰ トーマス・バーネット (1635-1715) : イギリスの神学者・地質学者。著書『地球の神聖な理論』(1682) における地球の形成の自然神学的な説明は、聖書の「創世記」の記述との不一致を指摘され、物議を醸した。

³¹ *Encyclopédie*, t. 3, Art. CHAOS, p. 158a.

創造したという聖書「創世記」の記述に基づくキリスト教の創造説に抵触する。その「無神論的」な主張の代表者として、カトリック神学とスコラ学の哲学的支柱とされたアリストテレスの名を挙げるのは、無神論を正当化する挑発的な議論に見えなくもない。

一方、地球はその起源まで遡ると無形の塊に過ぎなかった、という後半部分のバーネットの推論は、あくまで神による天地創造を認めた上で、地球の「現在の形状」が、いかに歴史的に形成されたかを考察しようとする自然神学的・科学的な意図に発するものである。しかし、その主張も、創造者としての神の役割さえなければ、唯物論と紙一重なのが分かるだろう。

項目「混沌」の残りの部分でディドロは、モーセによる地球の起源の説明を最も古く、しかも聖書の「創世記」における記述やキリスト教の真理に適った説として紹介している。そして、モーセが描写する混沌とした自然には、多種多様な被造物を後に生む神意の決定が既に働いていることを理由に、神が創造した不定形の物質の塊から内的な発酵作用によって太陽や地球が生まれたとする説や、太古の「混沌」は彗星の大気を指すというホイストンの説を、真実味に欠ける見解として斥けている。

結論として、ディドロは、現在の姿のように形成される以前の地球が混沌とした状態にあったことは諸国民の記憶するところであり、聖書の記述との整合性に配慮さえすれば、混沌とした地球の起源について何を論じようと自由であるとしている³²。

以上のように、ディドロはモーセによる太古の混沌の描写を、聖書の「創世記」の記述とキリスト教の教義に最も適った説として詳細に検討しているが、ディドロが無神論者、唯物論者であることを知る現代の読者からすれば、モーセを引き合いに出してキリスト教の創造説を擁護する言説が、ディドロ本人の哲学的信念を表しているものとは到底思えない。むしろ、表向きは迷信や妄言として斥けてみせる古今の哲学者の見解や自然学者の科学的仮説に読者の関心を引きつけることがディドロの真の狙いであろうことは、聖書に配慮さえすれば混沌について何を論じようと許されとの結論からも、半ば明白だからだ。

こうして見てくると、項目「(天地) 創造」においても、項目「混沌」においても、アリストテレスは、地球の起源という重要な問題をめぐる様々な哲学的・科学的見解の歴史の中で、キリスト教の創造説と論理的に拮抗してきた「物質ないし世界は永遠である」という哲学的ドグマの論拠として援用されていることが分かる。むしろ、古代の異教世界の哲学者の見解という限定はつくものの、そのまま唯物論の主張としても読み替えられる「物質(世界)の永遠性」というドグマの強力な論拠としてアリストテレスを持ち出す身振りは、やはり、古代思想を無神論、唯物論の隠れ蓑として利用しようとする編集意図の介在を感じさせずにはいない。

³² *Ibid.*, p. 158, col. a-b.

7. 「穏健な啓蒙」と「急進的啓蒙」をつなぐもの:

ディドロらによるプロテスタント的合理主義の意図的な再利用

アリストテレスなど古代哲学の利用と並んで注目に値するのは、哲学史の分野をはじめとする『百科全書』の項目で典拠として利用された辞典ないし手稿の著者であるベール、ブルッカー、フォルメーが、揃いも揃ってプロテスタントの科学的な合理主義を共有しているという事実である。彼らは、ジャック・プルスも指摘しているように、カトリックおよびプロテスタントの他宗派の神学や解釈を批判することはあっても、キリスト教の教義そのものを破壊しようとする意図までは持ち合わせていなかった。

だが、徹底的な懐疑に基づいて古今の歴史記述の誤りを剔出したベールの『歴史批評辞典』は、先述のように、啓蒙思想の武器庫の異名を取ったことから分かるように、宗教や権威や伝統に合理主義的批判を加えたヴォルテール、ディドロら啓蒙全盛期のフィロゾフ達にこぞって活用された。彼らにとって、ベールの『歴史批評辞典』は、非合法的な出版や写本の形で流通した理神論、無神論、唯物論など地下思想と並んで、宗教批判や伝統批判の論点やトポスの一大供給源となったのである。

『百科全書』では先述のように、ベールに加え、ブルッカーやフォルメーの著作も典拠に利用された。このことは、プロテスタント的な合理主義を共通点とする彼らの議論が、ディドロらにとって、聖書やキリスト教の教義への恭順を示しつつ、異端的・反宗教的な哲学的見解の数々について議論するための「合法的」リソースとして好都合であった可能性を示唆してはいないだろうか。その点で興味深いのは、ディドロがブルッカーの著作に認めた利点は敬虔なフォルメーと同じものではなかったはずだ、というジャック・プルスの指摘である³³。これが事実だとすれば、ディドロは、ベール、ブルッカーらプロテスタント系知識人が、あくまでキリスト教に対する信仰心からカトリック教会やプロテスタントの他宗派に向けた合理主義的批判を、キリスト教の基盤そのものを掘り崩すという、彼らが意図しない目的に「流用」・「悪用」したことになるだろう。

近年、啓蒙思想の先駆的潮流とメインストリームを形成した「穏健な啓蒙」と、スピノザの唯物論をルーツとするディドロ、ドルバックらの「急進的啓蒙」とを区別し、後者がフランス革命を経た近代的な民主主義社会の成立により直接的かつ政治的な影響を及ぼしたとの立論に基づく「急進的啓蒙」の概念がジョナサン・イスラエルによって唱えられ、従来の啓蒙観に一石を投じた³⁴。

³³ Jacques Proust, *op. cit.*, p. 247.

³⁴ ジョナサン・イスラエル著『精神の革命』森村敏己訳、みすず書房、2017年。

もっとも、この「穏健な啓蒙」と「急進的啓蒙」からなる二分法は、そこに含意される政治的なイデオロギー性を除けば、公刊著作で流通した「啓蒙思想」と非合法に出版・回覧された「地下思想」とを区別する従来の（それ自体が発想としては研究史上、比較的新しい）二分法の変奏と言えなくもない。いずれも、検閲制度の存在によって啓蒙期の作家・思想家達が選択を迫られた知的言説のスタイルが、表の世界の「公共的な言説」と地下の世界の「秘匿的な言説」、言い換えれば「合法的な言説」と「非合法的言説」とに分裂・二重化していた、との認識を共有するように思えるからだ。

だが、忘れてはならないのは、こうした二重の言説が、必ずしも知識や利害を異にする別々の実体的な社会集団によって担われたとは限らないことだ。つまり、穏健なイデオロギーの持ち主が「穏健な啓蒙思想」の普及を担い、急進的なイデオロギーの持ち主が「急進的啓蒙」の普及を担う、といった単純な「分担」が問題なのではなく、たとえばディドロなど、あるひとりの啓蒙思想家が「啓蒙思想」と「地下思想」、「穏健な啓蒙」と「急進的啓蒙」の間を行き来することは、当時むしろ普通に行われていたということである。事実、ディドロは『百科全書』の編纂者、啓蒙主義者のフィロゾフという「表の顔」と同時に、唯物論をモチーフにした『盲人書簡』（匿名による地下出版）や『ダランベールの夢』（死後公刊）の著者という「裏の顔」も持ち合わせていた。

こうして改めて考えてみると、「穏健な啓蒙思想」と「急進的啓蒙」の違いは、検閲制度を意識した「公共的な言説」と「秘匿的な言説」の戦略的な使い分けという観点からも説明できるかもしれない。あらゆる書物が検閲で厳しく取り締まられ、出版が常に言論弾圧の危険と背中合わせだった当時のフランスで、何をどこまで言うことが許されるのか考えた時に、二重言説を意図的に使い分けるという選択は、非常に現実的な解決策であったと思われるからだ。たとえば、作家人生の大半を獄中で過ごしたサドが、実名による公刊の形をとった「公教的」(exotérique) な作品群と、匿名による地下出版の形をとった「秘教的」(ésotérique) な作品群を書き分けたことは、よく知られている。

言論弾圧の回避を目的とする言説の使い分けが、当時の作家・思想家にとって当たり前だったとすれば、こうした言説操作は、個人著作に限らず、『百科全書』のように公刊を宿命づけられた集团的著作にも見られるのではないかと、というのが、本論における筆者の問題意識である。つまり、バールやブルッカーらプロテスタント系知識人による合理主義的批判や、そこで古代異教徒の迷信、誤謬として取り上げられる無神論、唯物論などの哲学的見解は、百科全書派にとって、キリスト教の「真理」がほぼ唯一の真理とされたアンシャン・レジームの言語空間で、ここまではぎりぎり許される「合法的な言説」という点で、利用価値が高い素材だったのではないかとということだ。

そして、個人の作家・思想家としては理神論、無神論、唯物論など、当時のキリスト教社会における思想の極北をひたすら歩みながら、投獄経験で言論弾圧の恐怖と『百科全書』刊

行の重責を痛感したディドロが、匿名に近い編纂者・項目執筆者の立場を利用して、ベールやブルッカーらの哲学的言説の背後に身を潜め、いわば「合法的闘争」を続行する安全策を採った可能性は、極めて高いものと思われる。

結論

中世以来、カトリックのキリスト教神学およびスコラ学の支柱に据えられ、哲学的権威として君臨してきたアリストテレス哲学およびアリストテレス主義は、十八世紀になると、特に自然学の領域では、デカルト哲学の浸透や実験科学の台頭などとともに時代遅れのドグマと見なされて凋落を迎えた。だが、キリスト教の教義やスコラ学の伝統と結びついたアリストテレスの論理学・形而上学は、啓蒙主義者達にその形式論理的な性格をしばしば批判されながらも、コレッジや大学のカリキュラム（教育課程）として長らく温存された。

一方、キリスト教神学と結びついたアリストテレスの哲学的権威は、無神論、唯物論など、当時の公刊著作で正面から論じれば処罰を避けられなかった禁制思想を、異教徒の古代人の迷信、誤謬として論じる大義名分をディドロら『百科全書』の項目執筆者にもたらしたとも言える。『歴史批評辞典』の項目「アリストテレス」や『百科全書』の項目「(天地) 創造」、「混沌」などの分析からも分かるように、ディドロらは、アリストテレスの無神論的・唯物論的見解に関する論点の数々を、ベールの『歴史批評辞典』やブルッカーの『哲学の批判的歴史』といったプロテスタント系知識人の著作から得ていた。

キリスト教の枠内で迷信や不寛容を批判する彼らの合理主義的議論は、検閲を経た公刊を義務付けられた『百科全書』において、宗教や伝統などをぎりぎりの表現で検討するのに都合な「合法的な言説」としての役割を果たしたと考えられる。『百科全書』の哲学関連項目でベールやブルッカーがなぜ頻繁に典拠として引かれるのかは、ディドロら啓蒙思想家がしばしば実践した二重言説、すなわち、検閲を意識した「公共的な言説」と「秘匿的な言説」との使い分けの慣行を背景とすることで、よりよく理解できるだろう。

『百科全書』が既存の辞典からのいわば「コピー & ペースト」を含む編集加工に多くを負っていることは近年の研究でますます明らかになっているが、ベールやブルッカーらプロテスタント系の合理主義者の哲学的言説は、単なる便利な情報源に留まらず、無神論、唯物論など、出版物での公言が許されない禁制思想の隠れ蓑としての役割も果たしていたのではないだろうか。ここに、啓蒙期における引用的言説の積極的な文化的機能が認められると言っても過言ではないだろう。